

1/2 成人式を終えて

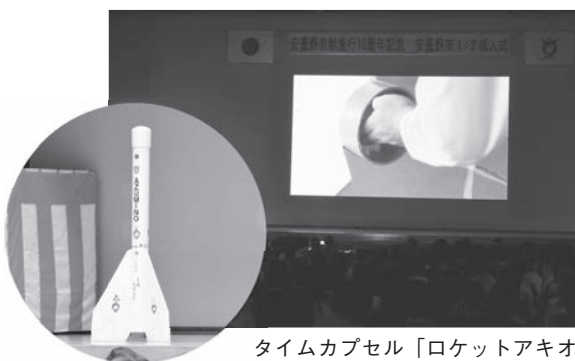


きたむら こうたろう
北村 虹太朗くん
(堀金小4年)

植松さんの話を聞いて、「どうせ無理」と自分からあきらめたり、人の夢を壊したりしてはいけないと思いました。宇宙の話も楽しかったので自分でもっと調べてみたいと思います。10年後、自分への手紙を見るのがとても楽しみです。



自分への手紙を預ける様子



タイムカプセル「ロケットアキオ1号」に手紙を収める様子

20歳の自分に向けて手紙をロケットに保管
10年後の成人式に本人へ
今 回、クラスでの取り組みと合わせて、児童の皆さんは、10年後の20歳になった自分に宛てた手紙をそれぞれが書きました。式典の最後には、市の職員に手紙を預ける様子がビデオで上映さ

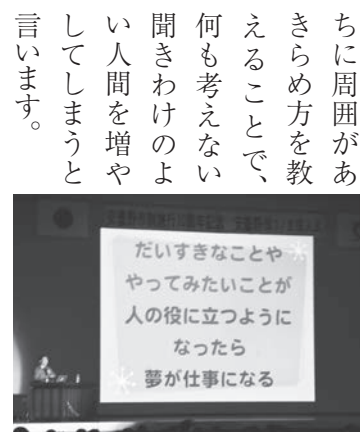
れた後、その手紙を納めたロケット型のタイムカプセルが披露されました。
市では、手紙を市役所内で保管し、10年後に成人式を迎える際、開催通知と共に本人に送る予定です。



講演する植松さん

「どうせ無理」は可能性を奪う大切なのは、共感すること
記念講演では、北海道赤平市でリサイクル作業用マグネットの製造の傍ら、ロケットや人工衛星などの開発にも携わる(株)植松電機専務取締役の植松努さんが、「夢を叶えるために」と題して講演しました。
植松さんは、子どものころの経験を交え、夢を叶えるには、学校での成績は関係ないと言います。紙飛行機が好きだった植松さんは、小さな会社でも創意と工夫でロケットを打ち上げることができたと話します。
一方で、子どもたちが夢を話す時、周りの大人や友人が「どうせ無理」という何気ない言葉を掛けてしまうことは、人の可能性を奪っていると言います。「人の可能性を奪うことは人の命を奪うことに等しい」と話し、子どもた

ちに周囲があきらめ方を教えることで、何も考えない聞きわけのよい人間を増やしてしまうと言います。
植松さんは「これからはあきらめず考える人が必要だ」と話し、子どもたちに夢をたくさん持つて、何でも挑戦してみようと呼びかけます。また、「人間は必ず失敗する生き物。伝記などの本をたくさん読み、先人の失敗から克服方法を学ぶことが、実現への近道になる」と読書の大切さも話しました。
そして、日ごろから自分の夢を話しあうことや、共感できる人とのつながりを増やしていくことも大切だとし、夢が人の役に立つようになれば、夢が仕事になると話します。
最後に、植松さんは母から教わった「思うは招く(思ったらその通りになる)」という言葉を紹介し、「どうせ無理」ではなく「だったらこうしてみたら」ということで夢は叶うと会場に語り掛けました。

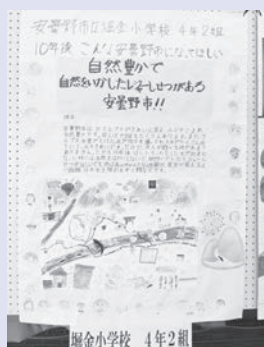


明北小



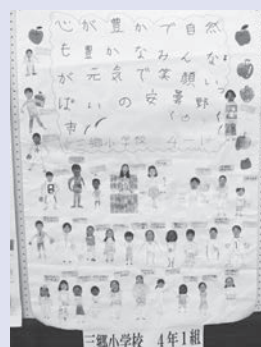
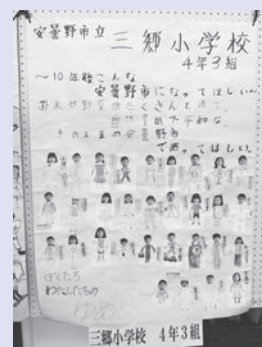
明南小
(2クラス・50人)
明北小
(1クラス・17人)

堀金小



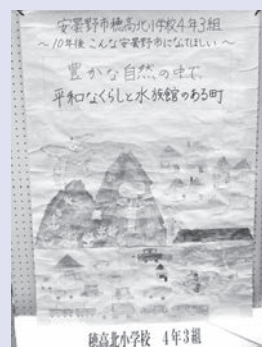
堀金小
(4クラス・108人)

三郷小



三郷小
(6クラス・187人)

穂高北小 (続き)



明南小

